

2017/11/14

document

## ドキュメント

東京ごみストーリー⑧

「もったいないない」けれど

ごみ収集車に積み込もうと持ち上げたごみ袋の中に、調理されていないしおれた小松菜が見えた。包みがそのままの和菓子賞味期限が過ぎていたのだろうか。「もったいないな」。ふと、子どものころの記憶がよみがえる。

「ごころさまです」。マンション管理人の元氣なあいさつに、ハッと我に返ったタイウォ・アバヨミ・クンレさん(50)は「おはようございます」と明るい笑顔と白い歯を見せた。人好きのする面さし。黒い肌のほおを幾筋もの汗が伝う。杉並清掃事務所(東京都杉並区)で働く派遣作業員のナイジェリア人男性だ。

埋蔵石油を背景にアフリカ有数の経済大国に成長したナイジェリアだが、タイウォさんが生まれた50年前は内戦のさなかだった。8人きょうだいの2番目だったから、家族の生活費や弟や妹の学費を稼ぐため近隣国で働いた。しかし、内戦後も軍事クーデターなどで政情不安が続き、思うような仕事はなかった。約20年前、当時世界第2の経済大国だった日本へ出稼ぎを決意し、海を渡った。

解体業や鋳物作りなど職を転々としながら、故国の家族へ仕送りを続けた。苦しい生活の中で、日本人女性と恋に落ち、結婚。1女1男に恵まれた。子育てのために今すぐ働ける仕事を探していた2011年夏ごろ、ごみ収集のアルバイト募集を知り、飛び込んだ。



「先輩たちはみな優しい」。タイウォさん(中央)がごみ収集の現場で働く理由のひとつだ—成田有佳撮影

日本人の先輩たちの背中を見ながら、仕事を覚えた。収集作業中に住民へのあいさつを欠かさないこと。相手をおもんばかること。ごみ収集車をごみ袋を手に追ってくる人がいれば、降車し、手袋を外して素手で受け取ること。「汚れた手袋のままじゃ失礼だと分かったのも、先輩たちのおかげです」

仕事が大好きなタイウォさんだが、ごみから感じる「この国の豊かさ」には戸惑う時がある。ほんの少し壊れただけで捨てられるおもちゃ。繕えばまだまだ着られる衣服。「自分の生まれ育った国ならば、修理するなり次に使ってくれる人を探すなりするでしょう。でも……」。少し考えて続けた。「ごみとして出されればごみ。それが日本のシステムですから」

コンビニエンスストア、ファミレス、家事手伝い、建設工事現場……。昨年、日本の外国人労働者数が初めて100万人を超えた。生活を支える場所で働く彼らの姿を見かけない日はなく、ごみ収集の現場でも中国やモンゴルなどアジア系を中心に珍しくなくなった。杉並の外国人収集作業員もタイウォさんを含め3人いる。

彼らの瞳に日本社会はどう映っているのだろう。一年の大掃除でたくさんのごみが出る最も忙しい季節がまもなくやってくる。 || つづく

# ドキュメント

## 東京ごみストーリー⑨

### 「対立の歴史」本質知る

建て替えを経て10月に再オープンしたばかりの杉並清掃工場（東京都杉並区）の一角に、資料館「東京ごみ戦争歴史みらい館」はある。高度成長のただ中、ごみを巡り、都と住民との間だけでなく、区同士のごみを巡る対立も起きた。「戦争」とまでいわれた紛争の歴史を記録しておこうと、工場再開に合わせてきた。

ごみの埋め立て地「夢の島」がある江東区と清掃工場計画のあった杉並区。1960〜70年代、都の用地取得の強引さに杉並区民が反発すると、江東区側は杉並からのごみ受け入れを拒否すべくバリケードをつくった。約180平方メートルの資料館には反対運動の様子を伝える等身大の白黒写真のパネルや新聞記事があり、当時の住民らへのインタビュー映像も流れる。

杉並清掃事務所の江川雅志所長(59)は展示ケースの中に懐かしいものをみつけた。金網の「ハエたたき」だ。「そうそう、これ！ 授業そっちのけで使っていたな」

江東区で生まれ育った。江川所長は、50年近く前の、小学生だったころのことをよく覚えている。夢の島には当時、毎日数千台の収集車が押し寄せた。燃やされていないごみまで野ざらしにされていて、ハエやネズミが大量発生した。収集車は渋滞し、車体からたれた汚水はひどい悪臭をまき散らした。「ハエたたき」は小学生の必需品。ランドセルにいつもさして登校し、



東京ごみ戦争歴史みらい館。江川雅志所長が懐かしそうな表情をした—後藤由耶撮影

教室で追い回した。給食のときは、とまったハエで真っ黒になったふきんをめくりながら、パンと脱脂粉乳をかき込んだ。

環境に配慮した清掃工場を建設すると都が打ち出したことでごみ戦争は収束していった。そして、東京23区職員の採用試験を受けた江川所長は杉並区に採用されることに。たぶん、勤務希望の区を記入するマークシートの「杉並区」の欄に、間違ってチェックしたから。いま、江東区から、杉並の、しかも、ごみを処理する清掃事務所にいるのは偶然だろうか。

思い出すのは、杉並区の採用面接で「ごみ戦争についてどう思う？」と聞かれたときのこと。当時の記憶がよみがえり、「江東区民はごみをおしつけられてきました」と口走っていた。でも採用された。だが、杉並区で働いてみると、住民たちの反対は「エゴ」と言い切れず、先祖からの土地を大切に、後世に残したい当たり前の思いからだったと知る。ごみ戦争は、両区の住民間の対立に関心が集まったが、行政側の進め方にこそ問題の本質があった。

ごみは生活に密着しているからこそ、何をやるにしても住民の理解と協力がいる。「みらい」をみつめるため「歴史」を刻んだ施設に立ち、江川所長は初心を思い出した。

11月16日

# ドキュメント

## 東京ごみストーリー ⑩

### 偏見を越えた「誇り」

人が生活する上で生み出されるごみは、臭くて汚い。そこに職業差別が生まれた。

東京23区の収集作業員を都が一括採用していた時代。自宅から遠い勤務地に配属する慣習があった。近隣に職業を知られると、いわれのない差別や偏見に家族が巻き込まれるのではないかと、子どもがいじめられるのではないかと、そんな不安があった。家族にさえ仕事の内容を隠し続けた人がいた。事務職を装って背広姿で出勤し、定年を迎えた人がいた。

採用が区ごとになり20年弱。時代は変わったかに見える。だが、回収への不満から清掃事務所に来た男性が暴言を吐いた。「ごみ屋がえらそうに」。そのとき、職員は言い切った。「ごみ屋ではありません。清掃職員です」。仕事への自負と、ごみを取っているだけではない自信が彼にはあった。「職業に貴賤なし」というけれど、人の心から差別意識をなくすのは難しい。でも、どんな人でもごみを出す。誰が出したごみでも収集するのが私たちの仕事です」。杉並清掃事務所の江川雅志所長(59)はそう話す。

杉並清掃事務所の人々は当初、私の取材を受けるところをためらっていた。でも、最後は「ちゃんと見て書いてほしい」と言ってくれた。知ってもらおうと、誤解や偏見を解消する近道だと思ったからだろう。

集積所をめぐるもめごと。祭りのふれあい



園児たちにごみの話をする「ふれあい指導班」のメンバー—成田有佳撮影

出される便乗ごみ。独居の高齢者を支える難しさ。増える外国人作業員。根強い偏見……ごみの現場で働く人々が日々目に見えているものは、誰もが直視を避けたがる問題だった。収集車を追いかける今回の取材で見えてきたものは、生活に密着している仕事だからこそ、もっとできる何かがあると知恵を絞る人たちの姿だった。

秋晴れの日。杉並区にある保育園に、車体の側面が透けて見える特別仕様のごみ収集車がやってきた。園児たちは目を輝かせた。

降り立ったのは杉並清掃事務所ふれあい指導班、通称「ごみのマルサ」の12人。この日は子どもたちへの環境教育が任務だった。リサイクルをテーマにした紙芝居、ごみの分別や収集車への積み込み体験。職員たちは子どもの目の高さまでかがみ、笑顔で話しかけた。「僕らが楽しく振る舞わなきゃ伝わらない。おうちにこの話を持ち帰ってもらいたいですからね」。班長の古川勝さん(49)が期待を込めた。

「どうだった?」。私が尋ねると、男の子が声を弾ませた。「おじさんたち、かっこよかったです!」。その言葉を聞いた職員たちがいっせいに破顔した。時代がゴトリと動く、そんな音を聞いた気がした。

〓おわり

(この連載は成田有佳が担当しました)